

祐子内親王家小弁小論

はじめに

祐子内親王家小弁は、「後拾遺集」に十五首の詠歌を入集する女流歌人である。この十五首という歌数も、和泉式部(六七首)、相模(三九首)、赤染衛門(三七首)、伊勢大輔(二五首)に次いでいる。この事實は、「後拾遺集」の序文で、

世にうたよみはおほくつもりにければ公任卿をはじめとして、

長能、道濟、道信、実方らの朝臣、をんなは小大君・泉式部、

むらさきしきぶ、清少納言、あかそめ、いせたいふ、小式部、

小弁など、おほくの歌よみどものうたつもれるころほひをえら

びければ、いかによき歌おほく侍けん。されば、げにまことに

おもしろく、きゝちかく、ものにこゝろえたるさまのうたども

にて、をかしくみゆるを、撰者のこのむすぢや、ひとへにをか

しき風体なりけん。

と、をんなの中に小弁を記している事實からも、当時の歌界ではかなり著名な女流歌人として認められた存在であつたらしい。

また、この小弁は、天喜三年五月三日六条齋院祿子内親王物語歌合に出席し、「岩垣沼」に關した物語や歌を詠み、この歌合の後見人の頼通が、小弁の物語を高く評価して他の物語の提出をどめてまでも作品を出すように命じたという逸話も残っている。このように、小弁は歌合での評判もよく、後の「十訓抄」や「古来風体抄」にも小弁の名が登場しているところからもかなり注目されていた歌人であつたらしいのである。

山之内 恵子

ところで、本稿では「後拾遺集」の特色の一つに数えられる女流歌人増大の意味とを考えあわせつつ、小弁の出自や閨歴、交友關係、歌合での活躍などを考察しながら、彼女の詠じた「後拾遺集」所収の十五首を中心に、その作風を探究したいと思う。そしてその歌が、「後拾遺集」の歌風や文芸性などのように影響しあつたのかも検討してみたいと思う。(以下本文引用は、糸井通浩氏「後拾遺和歌集総索引」による。)

一

小弁は、平安中期に活躍し、祐子内親王家の女房として出仕していた事實の他はその履歴、生没年に関しては明らかでない。

「勅撰作者部類」では「越前守懷尹女、祐子内親王家女房」、「和歌色葉」には「越前守藤原懷尹女、同(祐子)内親王女房」とあり、彰考館文庫蔵「後拾遺和歌集」の勅物によれば「祐子内親王女房、越前守藤原懷尹女、母越前守致書女」となっている。これらの資料によれば、父は越前守懷尹、母は彰考館文庫蔵「後拾遺和歌集」の注記から越前守致書の女ということになる。

ところで小弁の出自をめぐる諸問題に關しては既に樋口芳麻呂氏や(注1)小熊幸氏のご論考があり、その中で検討されているが、明確な小弁の出自を確定する資料は存在しない。時代的な考証や現存している注記から推測して、小弁が前掲した越前守藤原懷尹女とした時、「尊卑分脈」でこの懷尹女をあたつてみると、この小弁らしき人物に「康和五・九・九卒」と注記がつけられている。この注記に従えば、康和五年

(一一〇三)迄生存していたことになるが、小弁の活躍した最下限の資料は天喜三年(一一〇五)六条齋院禊子内親王歌合であるので、この康和五年卒とするには無理があり、従って小弁を懷尹女とするのは難かしいことになる。

また一方、樋口氏はこの小弁の父に関して「令尹女」を掲げておられる。この「令尹女」の根拠となるべき資料を記されていないので判然としないが、ただ時代的な点では支障はない。

なお、母については、彰考館文庫本「後拾遺和歌集」勸物に「母越前守致書女」とある。これに従って「尊卑分脈」「文徳源氏」の従四下越前守、左少弁武藏守致文の女に「後朱雀院梅壺女御乳母、後拾遺作者号上総乳母」と注記が付されている。この注記を信用すると小弁の母は、「後拾遺集」に一首(242)入集する上総乳母ということになる。またこの上総乳母に「前上総守源著信為妻、仍号上総」とあり、この注記の上総守源著信は上総乳母の兄にあたる人物である。とするとこの注記はどのように理解すれば良いだろうか。

この上総守著信は「尊卑分脈」によると、「肥後守為親子、上総介、従五上」とあつて肥後守為親と親子であつたという注記であろうか。そうすると、この著信は致書(文)の養子となり、上総乳母と結婚したのかも知れない。いずれにしてもこの彰考館文庫の注記に関しては断定しうる確固とした資料として考えるには疑問がある。

小弁が越前守懷尹女ということになると、この男に素意がある。素意は俗名を重経といい、「後拾遺集」に七首(60 259 305 402 419 999 1037)を入集する歌人で、父は「作者部類」「和歌色葉」などでは懷尹男とする。しかし一説では兵部卿重尹を実父とする。この重尹は、懷尹の叔父にあたるので、おそらく素意は養父を懷尹としたのであろう。「多武峯略記」によると、「素意法師者、越前守懷尹一男、越中守令尹孫、母祭主輔親娘也、素意俗日紀伊守従五位下藤原重経。巧詠和歌多入撰集」とあつて、康平七年(一一〇五二)六月廿八日粉河寺に詣でて出家し、延久三年(一一〇七一)二月十五日に多武峰に移り、永保三年(一一〇八三)には和泉国松村郷に精舎を建立した。

素意に関して、「袋草紙」は紀伊の夫とする。重経従姉妹の令尹女も祐子内親王家女房で「後拾遺」歌人であるからこの関係で紀伊と結ばれたのであろうか。

また、この紀伊は、中宮娘子腹の一女ということで一宮紀伊、または祐子内親王家紀伊と呼ばれ、「堀河百首」(康和末年一一〇二)四成立)の作者としても著名な歌人である。父を平経方(「和歌色葉」とも経重(「勅撰作者部類」)とも言う。母である小弁の關係で祐子内親王家に仕え、内親王の薨時迄仕えていたらしい。頼通や俊綱などとも交友があり、その歌合の活躍もめざましく、母の才を譲り受けて「百人一首」にも選ばれている。

簡単であるが、小弁の出自や閨歴と、娘である紀伊及び素意について触れてみた。資料的な面で確実な根拠となるものが現存しないので、小弁という歌人を浮きぼりにできないことが残念だが、次項で述べる交友關係や歌合での活躍の状況などから推して徐々にその種々相を明らかにしたいと思う。

二

彰子内親王、祐子内親王家に仕えていた小弁は数度の歌合に出席し、大式三位や出羽弁らとともにその歌才を競っていたらしい。その女房らとの交渉に関しては、「後拾遺集」雜一(863 864, 874 875)に小式部との贈答歌が見られる。小式部は本集にも二首(864, 874)、「千載集」(842)に入集する歌人で、小弁と同じ祐子内親王家の女房であり、その閨歴は、下野守藤原義忠女(「作者部類」)、源雅定公室(「尊卑分脈」)であつた人らしい。この小式部に関しても不明な点が多く、後一条院女房の式部命婦、禊子内親王家歌合出場の式部、後冷泉院女房で四条宮春秋歌合出席の式部命婦、禊子内親王歌合出場の小式部と四条宮春秋歌合出場の小式部が存し、これらの人物考証を綿密にせねばならない。

ただし、前述した小弁との贈答をする小式部については「作者部類」「尊卑分脈」にある注記は、はなはだ信用できない点もある。と

いうのは、「尊卑分脈」藤原氏宇合流によって姻戚関係を概観すると、下野守義忠は寛弘五年（一〇〇八）五十八歳で卒して、この女といたうことになる。「尊卑分脈」にある右大臣雅定公室になることは年齢的にもまず不可能であるし、またこの六条齋院祿子内親王歌合の作者にはなり得ないことである点で、この小式部に付された注記を信用できず、小式部については不明確な点が多い。

しかし、小弁との贈答歌から推して小弁とほぼ同世代の人物で、時を同じくして祐子内親王家の女房として活躍していたことはまちがひなからう。

前述したように本集に入集する贈答歌は、

六条前齋院に歌合あらんとしけるに右に心よせありときよと小弁がもとにつかはしける
小式部

あらはれて恨やせましかくれぬの汀によせし波の心を（雑一・874）

かへし

小弁

きし遠みたよふ波は半天によるかたもなき敷をせし（875）

とあり、六条齋院歌合を催すに当っての逸話めいたものがこの歌から読み取れる。小弁が右方に加勢するといううわさを聞いた小式部が、それを恨むという意の歌を贈り、対して小弁は岸から遠い所で漂っている波のように私の歌は中途半端などというとりえのない歌ですのに歎かわしいことよと答えたということであろう。いいかえればこのような贈歌をした背景には、当時小弁は相当に名声が高く、これに對して同じ中宮の女房として小式部は小弁を高く評価していたのであろう。また小式部にとって同じ祐子内親王家の女房として二人の間はかなり親密であつたのでこのような贈答歌がやりとりされたのであろう。

また、

来んといひつゝこさりける人のもとに月のあかゝりければつかはしける
小弁

なおさりの空たのめせて哀にも待にかならず出る月哉（雑一・863）

返し

小式部

たのめずばまたでぬる夜ぞかさねましたれゆゑか見る有明の月（864）も、小弁と小式部の関係を如実に物語るものと言えよう。小弁の歌は詞書にあるように来ると言つて来ない男の許に贈つた歌だが、いいかげんなうわの空の頼みにしないあなたなのに私はあわれにもあなたを待っています、その甲斐もなく月は必ず出てしまいますという意で、おそらく小弁のこの男に贈つた恨みの歌と解せる。そして、この歌を贈つたという事実を小式部は知り小弁に、頼みに思わなければまた出る月の夜を重ねることはないだろう。誰の為にこの有明の月を見るだろうか、見る人はいないという諦念を促す意の歌を贈っている。小弁と小式部は、おそらくほぼ同年代の歌人で、この贈答歌からも推測されるように二人は親密な間柄であつたらしい。

また、「雲葉集」秋中に、

水上月といふ心を

うつしとる水なかりせば久かたの月を一夜にふたつみましましや

という小弁の歌が入集している。出典は明らかではないが、この歌に続き、

俊綱朝臣、ふしみにて水上月といふことを講しけるにいやしき

ともからの中よりよみていたしたりける

水や空そらや水ともみえずかよひてすめる秋の夜の月

という歌がある。この作者は不詳だが、「袋草紙」上巻の雑談（98）

に橘俊綱の家で「水上の月」という題にて披講の折、田舎の武士の詠じた歌としてあげられ、この吟詠に對し思いがけずよく出来た歌と人々が感心し、そこに参会していた人々が自分達の不才を恥じたという逸話がある。この会に出席した歌人に、藤原義定（後拾遺集）初出歌人）や良暹、能宣、頼基らがいるので、前述した小弁の歌も「水上月といふ心を」という同じ題であるので、あるいは小弁もこの歌会に出席したのかも知れない。俊綱は、長元元年（一〇二八）から寛治八年（一〇九四）迄生存した歌人で、関白頼通を父とし、母は敦平親王の女源祇子で通称を伏見修理大夫といい、伏見に邸宅を構え文人雅交の場として広く門戸を供し、また当時の歌界に隠然たる勢力を有して

いたらしい。次に、時の実力者、権力者として「後拾遺集」編纂に数々の逸話を残す源経信が小弁に次のような歌を贈っている。

小弁がもとにつかはしける

君がため落つる涙の玉ならば貫ぬきかけてみせましものを

(恋四、恋四・810)

経信は、彼の歌集などから当時の女房であった出羽弁や美作、弁乳母、筑前、相模、加賀左衛門等との歌交関係や交友関係のあった事實は既に知られるところである。この歌は経信のこのようなはば広い女房との交友関係と同様に小弁との恋愛関係をもの語るものであるといえる。大納言経信集、師大納言家集(「私家集大成」中古Ⅱ所収)にも見えている。

経信は周知のとおり長和五年(一〇一六)から承德元年(一〇九七)に生存した歌人であるから、おそらく小弁が活躍した永承年間(一〇四六—一〇五二)、逆算すれば経信の三十代はじめから半ば位の時期に小弁との交渉があったものと考えられる。当時小弁の歌才の評判がたち経信の耳にも当然聞えてきたのであろう。

以上のように、小弁の交友関係は同じ祐子内親王家に仕えていた小式部や、伏見の邸宅にて勢力的に歌会を催して、父の頼通の文芸志向に同調して活躍した俊綱、当時の歌界で有力者と名高かった経信にそれが見られる。

この関係のいずれもが、小弁の歌才の秀れていた事實を媒介として生じていることが言えよう。

三

次に小弁の歌合での活躍の動向を見ることにしよう。既に和田律子氏が、「祐子内親王家のサロン形成」^(注4)と題して発表されているように祐子内親王家の女房達の歌合での動向や出仕動機について詳細に述べられている。

それによると、小弁の出仕の要因は他の女房達の縁故関係での出仕とは異なり、当時すぐれた歌才の持ち主と名声の高かった為に祐子内

親王家の有力な後見人であった関白頼通の文芸志向によるものでその結果、小弁も祐子内親王家に出仕したらしい。そこで小弁の歌合の出席の状況を「平安朝歌合大成」に従って列挙すると、次のようである。

① 122長元五年一〇月一八日上東門院彰子歌合

② 129長久二年四月七日権大納言師房歌合

③ 141永承五年六月五日庚申祐子内親王家歌合

④ 147永承六年五月十一日庚申祐子内親王家歌合

⑤ 160天喜三年五月三日六条斎院祿子内親王物語歌合

①は、ちょうど道長が薨じ、次の頼通の時代となつて後冷泉朝に向かうまづ先に上東門院の主催した晴儀歌合だが、これに出席した歌人

達は、上東門院に出仕する伊勢大輔や弁乳母らの女流歌人が主だが、当時の著名な相模や赤染衛門の出詠はななくうちわな歌合であつたらしい。この歌合では、四番左、五節と番え、

咲く花のたくひあるとぞ思ひける色色匂ふ菊の籬を

を詠み、九番左に弁乳母と番え、

夜な夜なの霜に色増す菊の花今日のためとや思ひ置きけむ

を詠出してゐる。

②は、権大納言源師房の三度目の自家歌合である。師房は寛弘五年(一〇〇八)から承保四年(一〇七七)二月一七日、七〇歳で没した

歌人で後中書王具平親王の一男で母は式部卿為平親王の女で、師房邸には和歌六人党やその他の歌人らが集まり文芸を愛好した。本歌合は夏一〇題一〇番撰歌合で、左方に加賀、頼家、五節君、重成、侍従乳母、右方に頼実、親範、義清、経衡、宰相君らがいる。十番に遣水を侍従乳母と番え、

堰き入れては鏡とそ見る朝毎にのどかにすめる水の流れを

を読み、侍従乳母の勝となつてゐる。

③は頼通の加陽院第において、高倉一宮祐子内親王を中心にした歌合で、五番左に、兵部少輔経衡と番え、

尋ね来るかひもあるかな山ざくら白雲とのみよそに見つれば

を詠じ、勝っている。また、十一番、同じ経衡と合せ、勝となる。

寝ぬ夜こそ数つもりぬれ郭公聞くほどもなき一声により（「後拾遺集」191）

十七番、経衡と番え持となった歌は、

さを鹿の声きこゆなり宮城野はもとあらの萩の花ざかりかも（「新勅撰集」234）

④は、「夫木抄」巻八に、

永承六年五月庚申夜祐子内親王家歌合、水鶏、小弁

門鎖せる宿とも見えぬ梢にてなにをあげぬとたたく水鶏ぞとある。

⑤の歌合は、天喜三年五月三日夜六条斎院祿子内親王の宮で主催された物語歌合で数々の逸話を残すが、道長時代の物語の流行と歌合の盛隆の結合したもので当時の宮々の女房達が出席し、文学史的にもその意義は大きい。

岩垣沼の中將

左

ほととぎす花橘のかばかりもいま一声はいつか聞くべき

以上、歌合での活躍を年代順に追ってきた。彰子、祐子内親王家に仕えそれに関連した歌合が主であるが、中には、権大納言師房歌合のように文芸的な歌合にも出席するなど、歌合での動向もめざましく、大いにもはやされたに違いなからう。

四

小弁には九十六首の詠歌がある。このうち勅撰集にとられた歌は四十六首（千載集二首269356、新古今集三首31910631488、新勅撰集一首234、続後撰集五首254255859913、続古今集二首194613、続拾遺集一首722、玉葉集九首1075884610011841402143426622762、続千載集二首3982144、続後拾遺集一首1005、風雅集一首12、新千載集一首1798、新拾遺集二首521447、新後拾遺集一首670、新統古今集一首850）と「後拾遺集」十五首である。この四十六首を概観するに、歌合などで題によって詠まれた歌が多く、作歌事情が示さ

れた歌や題しらず歌は少ない。

「夫木抄」の頭注に付された「家集」という注記から小弁に家集のあったらしいことが知られるが残念ながら散佚し、伝わっていない。

そこで、ここでは「後拾遺集」に収められた十五首の小弁の歌をめぐってその作風と「後拾遺集」に及ぼした影響などを中心に考察してゆきたいと思う。

春上、15に

春臨時客をよめる

むれてくる大官人は春をへてかはらすなからめつらしきかなとあり、この歌は詞書にある如く臨時客を詠んだものだが、「むれてくる」といった古来は鳥や動物の様相を表現するのに用いた語句を、大官人達が宮中に集まってくる状況を客観的にとらえて表現していることに新鋭な感さえる。

また、次の67、
題しらず
ほに出て秋と見しよに小山田のまた打かへす春もきにけり
ここでも、いつの間にか春耕の季節となつてるといった季節感への驚きを、初句の「ほに出て」は感覚的な用語を用いて四句目の「打かへす」と対応させて斬新な作風を感じさせている。

91、1192は、
とをき花をたつぬといふ心をよめる

山核心のまゝに尋きてかへさそ道のほとはしらるゝ
は、最近注目されてきている本歌の詞書のような「遠き花をたつぬといふ心をよめる」というような複雑な題を用いた詞書にて詠まれた歌である。このような傾向は「後拾遺集」や「金葉集」に多く見うけられ、一種の美的要素の文学性を追求する顕れであるうと思われる。

「遠き花をたつぬ」といったある種の美に対する現実性と観念性とが交錯するような独特な歌境を感じさせるようであり、そのような状況を表現する為に「心を詠める」といった極めて抽象的な「心」という語を付加させることでこの歌の世界は完成されている。

花にのみ心をとらわれて遠近感という現実性を見失ったことを、詞書の「とをき花をたづぬ心」という記述によって美的世界を構築しているようである。というのも平安末期からしだいに変化しつつある歌界の題詠という中世和歌へと移行する一つの萌芽期としてとらえられることと思う。

同じ複合題であるが、次の誹諧歌1192は、

同喩の中にこの身水月のことしといふ心を

つねならぬわかみは水の月なればよそにすみけんこともおもはずとあり、前述の91の詞書と同様に「心」が記されている。この詞書は「同喩の中に」とあり、前の1191の詞書中の維摩経の十喩を引用した歌である。というのも「後拾遺集」誹諧歌にはこのような語句や仏典などを引用したり、その中の世界を詠み込んだものが多い。

このように歌作上にもある種の、漢詩文の影響や、単なる社交上での和歌ではなく歌が徐々に文芸性を希求して、その世界を拡大していくといった傾向が萌芽しはじめるのもこの期の特色といえるだろう。小弁もこうした文学性を何らかのかたちで享受したことと思われる。

また小弁には、時鳥と七夕を詠んだ歌が目立っている。

191、203(夏)は時鳥を詠じた歌だが、

ねぬ夜こそかずつもりぬれ郭公きくほどもなきひとこゑにより

は、寝ない夜が続いて時鳥の鳴き声を待ち望みそれだから、なお興深い鳴き声なのだというほととぎすへの讃歌と、ひと声しか鳴かぬほととぎすのあきたらなさを詠んでいる。また、203の、

ねてのみや人はまつらんほととぎす物思よはのきかぬよそなき

は、夜も寝ずにほととぎすの声を待つ宮廷人の様子が窺われる。本集にはこの二首のほととぎすを詠んだ歌が入集するが、後の「続後撰集」164や、「続古今集」194、「続後拾遺集」1605にも小弁のほととぎすを詠みえている。小弁の歌に限らず詠じた歌は「後拾遺集」頃からほととぎすを詠じた歌は、三代集のほととぎすを詠んだ歌と比較してみるとその詠みぶりは大きく変化しているようである。

それは、かつて「古今集」などでは、ほととぎすに自分の心を馳せ

たり、単にほととぎすの姿を詠むといったストレートな手法から、「後拾遺集」歌人たちは、ほととぎすという対象を生活の一つの美として登場させ、それから一つの観念的な世界を創りあげているといったような詠みぶりが生まれている。

小弁も、このような時代の流行をいち早く感受して「ほととぎす」の歌を詠出したのであろう。

七月六日よめる

一とせのすきつるよりも七夕のこよひをいかにあかしかぬらん

(秋上・238)

七月七日かせなといたく吹て斎院にたなはたまつりなとまりて八日まであるべきにあらすとてまつり侍けるによめる

たまさかにあふことよりもたなばたはけふまつるをやめつらしとみる

(秋上・247)

は、どちらも七夕を詠んだ歌だが、203は七夕の当日を詠んだものではなく、その前日の七夕を待ちわびる心の複雑さを、また、247は、詞書に記されるように風が強く吹きあれて斎院での七夕まつりが中止され、たまたま七夕が八日迄かかることになり、このようなことは年に一度の逢瀬よりも珍しい出来事だというよみぶりである。以前では七夕の行事を詠んだり、年に一度の逢瀬に関して詠むものが多かったが、小弁は、七夕の前日の様子や、八日まで七夕ののびたことなど、むしろ当然の事実が、偶発的な状態に対してのそのおかしみを詠じた二首がそれである。

恋歌は次の二首が入集している。

題しらず

65思ひしる人もこそあれあちきなく難面恋に身をやかへてん

相手がつれなく思うようにならない恋であるう。もはや我身を滅ぼしてしまいたい。それを哀と想ってくれる人もあろうかと詠んだ歌である。

803我恋はますたの池のうきぬなはくるしくてのみ年をふる哉
歌枕のますた(益田)の池を詠んだ歌だが、この歌も前歌と同様満

されない恋の状態をよんだ歌として理解できる。うきぬなはによって心の動揺をよみ、苦しい思いだけで年を経ってしまったという意味の恋歌であろう。恋歌に関しては、それほどの技巧もなく素直に詠じているようである。

雑歌は次の八首が入集する。863、864、874、875は小式部との交友関係で述べた贈答歌である。

世中はかなくて右大将通房かくれ侍ぬときよて

901かすならぬ身のうき事は世間になきうちたにたにいらぬ也けり

は、詞書にもあるように右大将通房の没(寛徳元年一〇四四・二・四)

したことを知り詠んだ歌だが、数えたててとりあげるほどの価値もない我身の憂いことよりも増して心の中に入らないほど悲しく物憂い無常を感じるのだといった歌であろうか。おそらく、詞書より察すれば小弁もこの頃には老境に達していたものと考えられる。

また

五月五日ふくなりける人のもにつかはしける

996けふまでもあやめしられぬ袂には引たがへたるねをやかくらむ

は喪に服する人に贈った歌だが、服する人の嘆きに物の善悪もつかないようなお心で、それを解きほどす根も隠れてしまっているのでしょうと、服者をなぐさめる歌で五月五日にちなんであやめを持ち出して

いる。

1192は誹諧歌で、

同喩の中にこの身水月のことしといふ心を

つねならぬわかみは水の月なればよそにすみけんこともおもはず

と、前の歌から受けて維摩経の十喩の維摩経第七観衆生品、十喩云、如智智者、見水月中、月。菩薩、觀衆生、為若、此云々。を典故に詠んだものと思われる。その意は、変わりようのない私の身はどうにもならないが、自分とは別の世界に属すると認められる所に住むことは思いもよらないことだと宗教感を織り込んでいる。

この「水の月」という用語に関しては、「国歌大観」「統国歌大観」には見られず、おそらく小弁によって詠まれたのが最初であろうか。

以上のように小弁の歌には、一種独特なおもしろさがある。このおもしろさとは、通俊が「後拾遺集」の序文で言う「げにまことにおもしろく、きょちかくものにこころえたるさま」に象徴されているように思われる。先に取り掲げた十五首の小弁の歌は、その発想や表現、用語が新鋭で閃きを感じさせる。それは古来の歌人達が使用しなかつたような珍しい用語を巧みに織り込んだ機智的な歌が多い。読む対象を独特な視点から捉えた逆説的な趣向をも感じさせる。おそらくこうした小弁の新趣向は、当時の歌界ではセンセーショナルな作風として注目され、秀れた歌才の持ち主としてもはやされたのであろう。

小弁のこうした「をかし」を感じさせる歌に「後拾遺集」撰者である通俊も賛同し、十五首という地位を与えたことは、若い通俊の歌学に対する柔軟性と革新性をも感じさせている。

注(1)「国文学」昭34・3「祐子内親王家紀伊」

(2)「国文学論考」昭46・12「祐子内親王家小弁と岩垣沼物語」

(3)「袋草紙注釈」(昭51・3刊、塙書房)

(4)立教大学「日本文学」39号(昭52・12)